
座敷わらし

ほしの すばる

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

座敷わらし

【Nコード】

N2757E

【作者名】

ほしのすばる

【あらすじ】

オレ様の名前は天丸。座敷わらしという妖怪だ。オレ様が今厄介になっっている尊西家とある事件が起こった。オレ様の活躍に刮目するのだ！

プロローグ

オレ様の名は、天丸^{てんまる}。誰がつけてくれたのかは知らない。気が付いた時には仲間たちにそう呼ばれていた。人間たちはオレ様のことを『座敷わらし』と呼んで、家を幸せに導いてくれる妖怪として重宝してくれた。

が。それは百年前までの話だ。

人間たちは時代とともに裕福になっていき、オレ様は必要とされなくなつた。人間たちの夢といつしよに、オレ様たちの妖力もなくなつていった。そして、妖力を失つた仲間たちは

次々と消滅していく。生き残る道はひとつだけあつた。それは負のエネルギーを受け入れる

ことだ。すなわち、人間の純粋な心ではなく、淀んだ悪意な心をエネルギーにするのだ。し

かし、オレ様にはそんなことはできなかった。

ついにオレ様にも年貢の納め時つてのがやってきた。

と、思つた矢先のことだつた。

「どうした、ぼうず。お腹が空いているのか？」

夢を忘れてオレ様の姿が見えなくなつたはずの人間の中に、オレ様のへばつている姿が

見える奴が現れたのだ。

その人間の名は、尊西^{たかとりしげまさ}繁政。後で知つたのだが、繁政は日本では

一、二を争う天才画家

だつたらしい。しかし、戦争で右手を失い筆が持てなくなつていたので。だが、繁政は絵へ

の情熱を捨てることができず、戦後間もない街に画廊を建てたのだ。その想いがオレ様

を救ってくれたのだ。

妖力を失ったオレ様は生きていくだけが精一杯で、繁政の右手を治してやることはできなかった。

こんな役立たずのオレ様を繁政は温かく迎えてくれた。

そして、その出会いから五十五年後に繁政は死んだ。

尊西たかとりしげまや繁政しげまさが死んでからもう三年になる。まだ昨日のこのように
思える。というよりは、

繁政が死んだという実感が無いのだ。主人あるじとの別れは今回が初めて
というわけではな

いのだが。

「天ちゃん、動いちゃダメだってば」

想いにふけてナールバスになっているオレ様を叱っているのは、

尊西たかとりあやめ綾女。繁政の孫娘

だ。そして、オレ様の新しい主人なのだ。オレ様は綾女のおかげで
今もこうして生きてい

られるのだ。綾女は繁政のような画家を目指している。オレ様は今
二階の綾女の部屋で

絵のモデルになっているのだ。机とベッドとローチェストがあるだ
けの、女の子にしては

質素な室内なのだ。唯一の飾りと言えば、壁に貼ってある家族の絵
ぐらいだ。もちろん、

オレ様も入っている。似ているとは言い難いが。

綾女は大きな瞳でオレ様をじっと見つめ、それをスケッチブック
に描いている。白いト

レーナーとジーンズのオーバーオールが綾女のお決まりのスタイル。

「まだなのか、綾女？」

何度かモデルになったことはあるのだが、じっとしているは辛い
のだ。

「できたあ」

「ホントか？ どれどれ」

オレ様はスケッチブックをのぞき見た。

「……………」

ちよつとでも期待したオレ様が間違っていたかもしれないのだ。

綾女は絵がヘタなのだ。自慢できるぐらいに。

「なかなかの自信作だわ」

しかし、満足している綾女に、オレ様は何も言えないのだ。

「お母さんにも見せてこよーっと」

「そ、それはやめておいた方がいいのだ」

「どうして？」

綾女が傷付くからだ。と、言いたいのがやはり言えないのだ。

「変な天ちゃんね」

綾女は足取り軽く一階へ降りていく。心配なのでオレ様も金魚の糞の如くついていく。

綾女は勝手口を開けて、店の方に入っていく。

店というのは、繁政が残した画廊。なのだが、今は半分が酒屋と
いう妙な組合せの店に

なっている。娘の祐子ゆこが酒屋の三男坊と結婚した時に強引に改造して
しまったのだ。

「お母さん、見て見て。綾女の久々の自信作を！」

商品の補充をしていた祐子はやれやれといった感じで綾女の持っ
てきた絵を見る。

「あら、ホント。今回はうまく描けてるじゃないの。かわいい子ブ
タちゃん」

そ、それは思っているも口にしてはいかんだ。

「ちがーうっ！ これは天ちゃんだよ」

綾女はふうとほっぺをふくらませる。

仕方ないのだ。誰がどう見たってそれはオレ様ではなく、ブタに
見えるのだ。

「お母さんだつて中学の頃までは天ちゃんが見えてたんでしょ。

覚えてないの？」

「お母さんの記憶に間違いがなければ、天丸の髪はふさふさと長か
つたし、顔だつてそん

なブタの鼻じゃなかったわよ」

祐子の記憶は正しい。

風になびくさらさらロングヘア。

りりしい眉毛。

切れ長の瞳。

ひきしまった口元。

非の打ち所のない容姿をしているのだ。

「あ、でもこのちよつと垂れ下った目なんかは似てるかもしれないわね」

誰の目が垂れているのだっ。

やっぱり祐子はオレ様のことを覚えてないようだ。絶対オレ様の目は垂れてないのだ。

中学の頃までは祐子もオレ様のことが見えていたのだ。が、現実を目を向けるようになって

た祐子はいつしかオレ様のことが見えなくなっていた。

「せっかくの自信作だったのに」

綾女はガツクリと肩を落とす。だからやめておいた方がいいと言ったのだ。

「あ、もうすぐ四時だ。急がなきゃ」

店の時計を見た綾女が、バタバタと慌てて家へ戻ろうとする。

毎週土曜日のこの時間。綾女は決まって近くの白鳥公園にスケッチに行くのだ。しかも

ひとりで。なぜかオレ様を連れて行くこととはしない。普段は嫌がるオレ様を無理矢理連れて

て行くこととするくせに。

「綾女、待ちなさい。隠しておいてもすぐわかるから言うておくけど」

「何、お母さん。綾女、忙しいからまたにして」

「来月お店を改装することに決まったから」

綾女の動きが止まった。

店の改装。それは繁政の画廊をなくすという意味だった。

「どうして？」

「おじいちゃんがない今、お客もこない画廊なんかあったって仕方ないでしょう。だから、お父さんと相談してディスカウントショップにすることにしたのよ」

そういえば、この間『白鳥商店街を盛り上げる会』とかいう奴らがきて、そんな話を祐子たちにもちかけていたのだ。

ディスカウントショップなんかに変えたところで盛り上がりとも思えないのだが。

「なんでそういうこと勝手に決めちゃうのよ。綾女は絶対に反対だからねっ！」

当然の如く、綾女は反対する。

「この画廊のためにおばあちゃんはずっと苦労してきたのよ。おばあちゃんが早くに亡くなったのだからおじいちゃんの夢のせいよ。だから、画廊を壊すのよ」

「おじいちゃんは悪くないもんっ！」

おじいちゃんっ子だった綾女は、繁政を悪く言われたことで大粒の涙をポタポタ落とす。

「お母さんのバカあ！」

「綾女！」

綾女は泣きながら店を飛び出した。

「いつまでたっても子供なんだから。天丸、いるんでしょう？綾女のこと頼むわね」

見えなくなっても、祐子はオレ様を感じることができる。

オレ様は言われるまでもなく綾女を追った。

座敷わらし

綾女は商店街を抜けると、白鳥公園に入ってしまった。この公園の中央には大きな池があつて、この季節になるとたくさんの白鳥がやってくる。公園や商店街の名前の由来はここからきている。

綾女は池の周りにあるベンチに座つて泣いていた。

「そんな薄着では風邪をひくのだ。とりあえず、家に戻った方がいいのだ」

「いやよつ。お母さんが画廊を壊すのをやめるって言ってくれるまで帰らないんだから」

強情なところは祐子にそっくりなのだ。

「しかしだ」

「天ちゃんは平気なの？ おじいちゃんの画廊がなくなつても」

平気なわけではないのだ。あれは繁政の夢のかたまりだ。無にしたくない。だが、祐子の言つていることもわかるのだ。

「ここは一度帰つて、祐子と話し合つてみるのだ」

「いやつたらいやつ！ 天ちゃんはお母さんの味方する気？」

オレ様も辛い立場なのだ。

「そうではないのだ。オレ様は綾女の身を心配して」

「悪いけど、姉弟ゲンカならよそでやってくれるか？」

オレ様と綾女が大事な話をしている最中だというのに、横やり入れてくる野郎はどいつなのだ。

そいつはスケッチブック片手に立っていた。

高校、いや大学生くらいか。ここでスケッチでもするつもりだったのか？ 男はまじまじとオレ様を見ている。

オレ様が見えている？

「茶髪にピアスか。最近の小学生はイカれてるな」

男は小さくため息をもらす。明らかに小バカにしている態度。不躰な奴なのだ。しかも、

このオレ様をつかまえて小学生などとは無礼千万。礼儀というものを教えてやるのだ。

「誰が小学生だっ！ オレ様はなあ、むぐっ」

言いかけて、綾女に口を塞がれた。

「ごめんなさい。邪魔しちゃって。どうぞここでお好きだけスケッチしてください」

「……………」

綾女はオレ様の手を引っ張って、ダッシュで茂みの中へ逃げた。

「なんで謝ったりするのだ？」

「あの人、天ちゃんのこと見えてたよね？」

答えになってないのだ。

綾女の目は虚ろだった。顔が赤い。でも、風邪とは少し違うようだ。

オレ様はピンときた。綾女はあの男に会うために、毎週ここに来ていたのだ。

つてことはだ。

「綾女はあの男のことが好きなのか？」

「なななな何いきなり」

「どうやら凶星のようなのだ。思いつきり動揺している。耳まで赤くなっているのだ。」

「天ちゃんに隠しても仕方ないよね。あの人は秦虎太郎はたこたろうさんって言うって、元美術部員だったの」

綾女の話を簡略するところだ。

そのコタローって奴が美術部員だった頃は、各コンクールに必ず入賞していた実力の持ち主だったらしい。が、去年いきなり退部して絵を描かなくなり、

勉学の鬼となった。それは綾女が高校に入学する前の話らしいのだ。

で、綾女は部室に残っていたコタローの絵を偶然見てしまいファンになった。そして、なぜか絵を描かなくなったはずのコタローが、毎週土曜日の決まった時間にこの公園で絵を描いているのに気付いた綾女はコタローに会うためにここへ来たというわけなのだ。

どつりでその日だけはオレ様を連れて行くことはしないわけだ。

「コタローは綾女のこと知っているのか？」

「たぶん知らないと思うよ。学校では顔合わせしたことないし、口きいたのだから今日が初めてだもん」

まさか、いつもこんな茂みに隠れて見ていたなんて言うのではないだろうか。

「いつもここから見てただけだったから」

「……………」

それはあまりにも悲しすぎるのだ。ここはオレ様が綾女のために一肌脱ぐのだ。

「あ　っ！」

いきなり綾女は小さな声で悲鳴を上げた。

「綾女のスケッチブックがあ」

綾女が指差した先には、ベンチの上に置き忘れた綾女のスケッチブックを手に取るコタ

ローがいた。

「センパイに綾女の絵見られたら、恥ずかしくって死んじゃうよーっ」

た、確かに恥ずかしいかもしれないのだ。

「オレ様に任せるのだ」

オレ様は綾女のスケッチブックを取り返すため茂みを出る。

が、オレ様が辿り着いた時には、コタローはもうスケッチブックを開いていた。

「そのスケッチブックを返すのだ」

「これはお前の姉さんのか？」

相変わらず不躰にしゃべってくる奴だ。綾女は姉さんなのではないのだが、今はそんな

ことをいちいち説明している余裕はない。

「モデルはお前だろう？」

コタローは何とオレ様の絵（認めたわけではないが）のページを開いていたのだ。これ

はもう致命的としかいいようがない。

「どうしてその絵がオレ様だと思うのだ？」

「一目見ればすぐわかる。姉の弟への気持ちがよく描けているからな」

こいつ目がおかしいのではないのか？

どう見ればこの絵がオレ様に見えると言うのだ。

「とにかく、それを返すのだ」

オレ様はあえて肯定せず、スケッチブックを奪還する。

オレ様はちらりと茂みの方を見やる。瞳にハートマークを浮かべた綾女の顔が茂みから

はみ出していた。気に入らない奴だが、ここは綾女のために一肌脱ぐことにするのだ。

「尊西綾女を知っているか？」

「お前の姉さん。そのスケッチブックの持ち主だろう。美術部の部長から聞いたことがある」

座敷わらし

何だ、ちゃんと知っているではないか。

「妄想癖があるってな」

綾女を知らない奴はみんなそう言う。

オレ様のせいなのだ。繁政が死んだ後、綾女と離れたくなかったオレ様は学校にいつし

よに行っていた。オレ様が見えないみんなには綾女がひとりしゃべっているようにしか見え

えないのだ。次第にみんなは綾女には妄想癖があると言って白い目で見るようになった。

そんなことになっても綾女は決してオレ様を責めたりはしなかった。いつも笑顔でオレ様

の手を引つ張ってくれた。綾女に友達ができないのはきっとオレ様のせいなのだ。だから、

オレ様は学校に行くのをやめたのだ。綾女のために。しかし、みんなの綾女を見る目は変

わらなかつた。

「貴様はオレ様のことが見えていたのに、どうして綾女を助けてやらなかつたのだっ！」

コタローが一言言ってくれていれば、綾女はみんなから白い目で見られずにすんだとい

うのに。友達だつてたくさんできたかもしれないなかつたのだ。

「何わけのわからないこと言ってるんだ？」

興奮するオレ様をコタローは子供扱いして頭をぐりぐりする。

その時、コタローの手を通して奴の夢が、オレ様の中に流れこんできた。妖力を失つて

も、人の夢だけは身体に触れることで感じる事ができるのだ。そして、その夢への想い

がオレ様のエネルギー源となるのだ。が、たった二人だけではまだ妖力を取り戻すこ

とはできない。

「貴様の夢は……」

「天ちゃん、何したの？」

茂みの中からずつと様子をうかがっていた綾女が慌ててすっ飛んできた。

「尊西」

一瞬、コタローの表情が硬張った。

それとは裏腹に名前を呼ばれた綾女は、すっかり舞い上がっていた。

「あ、ああああの、ごごごごめんなさいっ！ 邪魔する気はなかつたんです。そそのの、

スケッチブックをか、かか返していただこうかと思つて」

だめだ、こりゃ。

コタローは自分のスケッチブックを閉じて、帰り支度を始めた。

「すすすす好きですっ！」

綾女、爆弾発言だぞっ。大胆すぎるというものだ。

「あ、えええ絵ですっ！ センパイの絵が大好きなんです！」

綾女は顔から火を吹き出しそうなくらい真っ赤になっている。

「俺の絵のどこが好きなんだ？」

コタローは背を向けたままだった。

「うつつまきは言えないんだけど、センパイの絵を見ていると温かくなつて安心できるん

ですっ。だから、それを描いたセンパイは」

「決めつけるなよな」

「えっ？」

「絵がそうだからって、お前の枠内で俺をそういう人間だと決めつけるなつて言ってるんだよ」

「だよ」

コタローの意外な冷たい反応に、綾女は戸惑う。

「そんなつもりじゃ……」

「何も知りもしないのに、勝手に決めつけられるのは迷惑なんだよ」
言いたいことだけ言つて、コタローは帰っていった。やっぱり不

躡った。それにしても、なぜコタローはそんなことを言うのだ。

奴の夢は……。

「あの絵を見ればセンパイがどんな人かなんてすぐわかるよ。好きになっちやいけなかったのかな。迷惑だったの……かな」

語尾が震えていた。オレ様の上空は晴れのち綾女の涙雨に変わっていった。

「天ちゃーんっ！」

綾女はわーわー泣きながら、オレ様に抱きついてきた。

至福の喜び。

と、言いたいところなのだが、この状況では両手を上げて喜ぶわけにはいかないのだ。

「綾女、あんな男のことなんかさっさと忘れてしまっただ」

オレ様は綾女を抱きしめるため、青年ヴァージョンへと変身する。妖力を失ったオレ様

がこの姿でいられるのは一日一回が限度。しかも、たったの三分間だけ。自分で言うのも

おこがましいが、青年ヴァージョンになったオレ様は超絶美形。コタローなど足元にも及

ばないのだ。

「やだっ！ 綾女、センパイのこと忘れないもん」

しゃくり泣きながらも綾女は言う。仕方ない。乗りかかった船なのだ。

「綾女はちょっとここで待っているのだ」

「どこに行くの？」

「綾女のためにコタローのことを知りに行ってくるのだ」

オレ様は急いでコタローの気配を追った。

座敷わらし

コタローの気配を追ってオレ様は、奴の家に辿り着いた。掘つ立て小屋のような粗末な家だった。震度3の地震でもきたらひとまりもないのだ。ななめに傾いた古い表札には『秦』と書いてある。「じゃあ、母さん行ってくるから」

たてつけの悪い玄関の引き戸がガタガタと言いながら開いた。

コタローだ。

「どうしてここにいる？」

さつきとは全然違う低い声で、コタローはオレ様をにらみつけた。

「何も知らないから、知りに来たのだ」

「ずいぶんと姉さん想いなんだな」

抑揚のないセリフを吐き捨てる。

「どうしたの、虎太郎？」

奥からやさしい女の声がする。声の感じからいって母親なのだ。

「いや、何でもないよ」

コタローは引き戸を閉めると、オレ様の首根っこをつかんで走った。オレ様はネコではないのだ。

家から離れると、コタローは路地にオレ様を降ろす。

「どういっつもりなんだよ？」

「つもりはないのだ。オレ様はコタローのことを知りに来ただけだと言っているのだ」

「知ってどうする？ 尊西に教えるのか？」

「そうだ。綾女は本意だが貴様のことを好いている。貴様がどういっつもりなのかを知ればあきらめもつくだろう」

それまで無表情だったコタローの顔に変化が現れる。

「バカバカしいな。俺はバイトがあるんだ。お前たち姉弟に関わっ

ているヒマはないんだよ」

コタローは無視してさっさとバイトへ行こうとする。

「また逃げるつもりなのか？」

コタローは振り向かない。そっちがそうくるなら、オレ様は卑怯だがこのテでいかせてもらうことにするのだ。

絵を描かなくなったはずのコタローが白鳥公園で絵を描いていた理由。答えは簡単だ。

「貴様は毎日綾女がああ公園でスケッチをするのを知っていたのだ。綾女と話すチャンスがほしかったのだ。だが、貴様は逃げた」

「……………」

コタローの足が止まった。が、まだ振り向かない。最後まで言わせるつもりなのか。

「絵描きの夢を捨てたはずだった貴様の夢は、綾女と……………」

「だまれっ！」

オレ様の言葉はコタローの声にかき消された。

「言ったはずだ。何も知らないくせに勝手に決めつけるなど」

結局、コタローは振り向かず走って行ってしまった。

逆効果だったようなのだ。ま、おかげで、コタローの手からまたあいつの思いが伝わってきたから良しとするのだ。

オレ様は急いで綾女のいる白鳥公園に戻った。

綾女はベンチに座ってまだ泣いていた。あれから一時間は経っているはずなのだ。よくそんなに涙が出るものだ。

「綾女、もう泣くのはやめるのだ」

「天ちゃん」

オレ様の顔を見た綾女は拍車がかかってますますひどく泣き始めた。

「オレ様がコタローのことを調べてきたから泣くのはやめるのだ」
「ホントに？」

滝のように流れ落ちていた綾女の涙がピタツと止まる。現金なものだ。

「コタローは父親のような画家を目指していたらしいのだが、父親の死によって世間の厳しさを思い知らされたのだ。父親のように夢だけを追っていれば母親に苦勞をかけることになる。奨学金制度の一流大学へ行けば一流商社へ入社することもできる。そうすれば、給料もたくさんもらえて母親を楽させてやることができると思っ
ているのだ」

コタローは世の中お金と学歴がすべてだと思っ込んでしまっっているのだ。

「せつかく才能があるのに、もったいないよ。それにセンパイは夢を捨てたりできる人じゃないもん」

コタローは一度捨てたはずの夢を綾女によって再びよみがえらせてしまったのだ。だが、今は綾女には言えないのだ。

「綾女、もう一度センパイに会う！」

「会っでどうするつもりなのだ？」

「そんなの決まってるじゃない」

「綾女の気持ちもわかる。しかし、コタローの気持ちも考えてやるのだ」

行けばまた同じことの繰り返しなのだ。

「好きなものをやめなければならなかつたのだ。オレ様たちが口を出すことではないのだ」

今の綾女には酷かもしれないが、少し様子を見た方がいいのだ。

「陽も暮れてきた。家に帰るのだ」

「いやよ。言っただでしょう。お母さんが画廊壊すのをやめるっで言っってくれるまでは帰らないっで」

忘れてるかと思っでいたのに、ちゃっかり覚えていたのだ。こつと決めたらけっして曲げたりしない。そこが綾女の長所であり、短

所でもある。

「こんな時におじいちゃんのベルがあつたら綾女いっばいいっばいお願いするのになあ。あのベルだってお母さんが去年のクリスマスに綾女に無断で捨てちゃってさ。ホント、身勝手なんだから」

綾女は頬をぷうと膨らませる。

繁政が幼い頃、アメリカの兵隊にもらったというキラキラと金色に輝くベル。繁政はこのベルに一流の画家になりたいとずっと願っていたらしい。そして、その夢が叶った繁政はそのベルを『願いが叶うベル』として、綾女にプレゼントしたのだ。その頃にはメツキの剥がれて錆びたベルになっていたが、綾女はすごく喜んだのだ。それからは毎年クリスマスツリーに飾っては綾女は何やら願い事をしていた。しかし、それを去年祐子が過って捨ててしまったのだ。すぐに探しに行ったのだが見つからなくて、あの時も泣き喚く綾女をなだめるのに苦労したのだ。

結局オレ様はまた綾女のひとりっきりの反抗につき合うはめになったのだ。

この時、綾女の命が危険にさらされることになるとはオレ様も思ってもみなかったのだ。

お金のない綾女は歩いてでも行ける隣町の繁華街へ向かった。オレ様たちの住む白鳥商店街が静まる頃、この街は盛んになっていく。綾女のような子供が来るような場所ではないのだ。

綾女は寒さをタダでしのげる場所を探した。

「見て見て、天ちゃん」

綾女は能天気な声で手をハタハタと振りながらオレ様を呼ぶ。道路を隔てた向こう側に画廊があったのだ。

「あそこなら寒さもしのげて一石二鳥だね」

さすがは綾女だ。目ざとい。綾女は左右を確認し、道路を横断する。

「宮郷みやさとのかずのり和規展だつて。最近売れてきた新鋭画家だあ。こんな所でナマで見られるなんてラッキーだね」

店の自動ドアに貼られているポスターを見て、綾女は感動していた。絵のこととなるとホントに目がないのだ。綾女はうれしそうに中に入ってしまった。オレ様も綾女について中に入る。

「ん？」

何なのだ、この感じは？

中に入った途端、オレ様はなつかしい妖気を感じた。

仲間の妖気？

だが、仲間はみんな消滅したはずだ。別の妖怪でもいるのか？

ここ百年誰にも会ったことはないのだが。

「あつたかい。でも、誰もいないけど、勝手に入ってよかったのかな。ね、天ちゃん。天ちゃん？」

綾女に身体を揺すられて、オレ様は我に戻った。

「もう天ちゃんったら、綾女の話聞いてなかったの？」

「ごめんなのだ」

綾女はぶうと頬をふくらませる。が、すぐに綾女は飾られている絵に瞳を輝かせて次々と食い入るように見ていく。

「あれ、この絵。うちにあるのと同じだあ。ねえ、天ちゃん見て」
怒っていたことなどすっかり忘れて、綾女はオレ様の手を引っ張る。

紅葉した山の風景画。確かに似ているが、どこにでもありそう絵なのだ。

「きつと同じ場所で描いたのだ」

「でも、タツチや色使いまでいつしよだなんておかしいよ。これは絶対同じ人が描いたものよ」

綾女は絵はヘタだが、見る目はもっている。その綾女が言っただから間違いないだろう。

「私の絵に何か変な点でもありましたか？」

背後からの野太い声に、オレ様と綾女は振り返った。

一言で片付けてしまうと、原始人だ。それが宮郷和規の第一印象だった。本当にこの男にこんな絵が描けるのかと、思わず疑ってしまふのだ。

綾女は何回も宮郷と絵を交互に見た。

そして。

「この絵を描いたのあなたじゃないでしょう？」

宮郷からはこの絵に感じた情が感じられなかったのだ。つまりゴーストが描いたと綾女は言っているのだ。実際こういう世界ではよくあることだと、昔繁政から聞いたことがある。

「お嬢さん、何を根拠にそんなことを言うのかな？」

宮郷は動揺も見せず、大きな口を開けて豪快に笑う。

「どうやらオレ様は見えていないらしい。当然なのだ。こんな奴にオレ様の姿が見えるはずがない。」

「うちにもこれと同じ絵があります。でも、作者の名前は窪田隆くぼたたかしと言って宮郷さんじゃなかった」

「その窪田隆という画家がこれを真似て描いたのではないんですか」

？」

宮郷はあくまで冷静に対応してくる。

「そんなはずない。あの絵はおじいちゃんが七年も前に購入した絵なんだから。この絵は去年描いたものじゃないですか」

綾女はなかなか鋭いところをついてくる。

「心外ですなあ。そんなこと言われてもその絵は紛れもなく私の作品なんですよ」

「そこまで言うんだつたら、うちにある絵をここに持ってきてあげる。そして、たくさんの人に鑑定してもらえばいいわ。それなら文句ないでしょう」

綾女はかなりムキになっていた。宮郷も表情に苛立ちが現れ始めていた。

「あの男もバカではなかったということか。小賢しいマネをしおつて」

宮郷は罵声を飛ばす。

「お嬢ちゃんも運がないな。そのまま黙って素直に帰れば長生きができたというのに」

宮郷は綾女の左腕をつかむと、くるつとひねって綾女に背中を向けさせる。そして、騒がれないように残った手で綾女の口を押さえた。「綾女っ！」

オレ様は宮郷に飛び掛かった。が、オレ様の体は何か見えない力で宮郷から引き剥がされた。

何なのだ？ 今のは。

綾女の持っていたスケッチブックが落ちて、オレ様の絵のページが開いた。

それを見た宮郷は、

「何てヘタな絵だ。幼稚園児以下だな」

と、足で踏みつける。必死で抵抗する綾女だが、まだ三十代そこらの男の力には適わなかった。

自分の絵をバカにされ、悔しがる綾女。

「車を裏口に回せ」

宮郷はそばにいたもうひとりの男に命令する。

「くそつ、綾女を放すのだっ！」

だが、オレ様が見えていない宮郷にはオレ様の声は届かない。こんな時に妖力さえあれば、こんな奴一発で叩きのめしてやるのに。

妖力。まさか？ 不安な気持ちに煽られながらオレ様は綾女を追った。

宮郷は嫌がる綾女を裏口へ引つ張っていく。裏路地は人通りのまったくない物騒な道だ。

綾女をどこへ連れていこうとしているのだ？

宮郷は綾女を黒い車の中に強引に押し込むと、自分もその横に乗り込む。

綾女の呻き声が聞こえてくる。

「綾女っ！」

運転手によって閉められる後部ドア。オレ様は車に乗り込もうとした。

が。

オレ様はドアに触れる前にまたしても見えない力で引き離されてしまう。

「どうなっているのだ？」

「久しぶりだな、天丸」

さつき宮郷のそばにいた男が、オレ様を見下してうれしそうに笑っていた。このオレ様を見下すとは生意気な奴だ。青年ヴァージョンになれば貴様のような男は……って、こいつオレ様のことが見えている。しかも、今オレ様の名前を呼んだのだ。

「仲間の顔も見忘れちまったのか？」

大人の容姿から子供の容姿へと変化していく。

「貴様は？」

オレ様の目の前には、オレ様にそっくりな子供が立っていた。違うのは髪の色だけ。茶色か、黒色か。

「空丸くうまる、なのか？」

「まさかこんなトコでお前に会えるとは思ってなかったぞ」

空丸はオレ様と同じ座敷わらしだ。こいつも生きながらえていたとは。どうりで仲間の気配を感じるわけなのだ。しかし、昔の空丸とは何か違う感じがするのだ。

「どうして、ここにいるのだ？」

「悪いが、お前の主人には死んでもらうぞ」

「それはどうということなのだ？ 空丸、自分の言っていることの意味がわかっているのか？」

空丸はニタリと笑う。昔はこんなことを言う奴ではなかった。仲間内では気の弱いおとなしい奴だったはずだ。

「今のオレの主人は宮郷和規。主人の秘密を知った人間には消えてもらわなければ困るんだよ」

「綾女は純粹な夢を持った、今では残り少ない人間なのだ。なぜ、

それを殺そうとするのだ？」

「今の時代にそんな人間は必要ないんだよ」

空丸は憎しみの瞳をオレ様に向ける。

この六十年の間に奴に何があつたというのだ？

「綾女は殺させはしないのだっ！」

オレ様は再び車に向かってつつ走る。が、またしても引き離されてしまう。

「オレはお前と違って妖力が使えるんだ。ま、もっともその車には妖怪除けの符も貼つてあつてね。オレが妖力を使わなくても」

オレ様の体が車から大きく弾き飛ばされた。

「近付けないだろう？」

空丸は嘲笑う。

それでもオレ様はあきらめなかった。何度も体当たりしてボロボロになつていくオレ様。不様すぎて、綾女には見せられない姿なのだ。

「その符は人間でなければ剥がすことはできない。唯一、お前が見える人間はこの車の中。あきらめるんだな、天丸」

空丸は車の助手席に乗る。

どうして、空丸は弾き飛ばされないのだ？

オレ様が不思議そうな顔をしていると、またしても空丸は嘲笑う。

「どうしてって顔だな。教えてやってもいいぞ。今日中にオレのもとへ来ることができたらな。そうすれば、ついでにこの娘も助けてやってもいい」

「本気でそんなこと言っているのか？」

「ああ。もっともお前にこの符を破るだけの妖力が残っていればの話だな」

「さっきの言葉、二言はないのだな？」

オレ様は空丸をにらみつける。空丸はオレ様に妖力がないことを知って言ってきたいるのだ。

「早く車を出せっ！」

上ずった宮郷の声を合図に車は急発進する。

「綾女っ！」

オレ様は走った。だが、車はすぐに見えなくなる。

このままでは綾女が殺されてしまうのだ。

オレ様はすぐに綾女の気配を探す。気を失っていないければ、どんなに離れていても察知することができるのだ。

しかし、居場所がわかったとしても、あの符が貼られているオレ様はどうすることもできないのだ。他の人間にオレ様の姿が見えれば……。

「忘れていたのだ」

いた、いたのだ。オレ様の姿が見えて、協力してくれる人間がたったひとりだけ。

オレ様はコタローの気配を探した。運のいいことにコタローはこの繁華街のどこかにいるのだ。

そして、コタローの気配を追って辿り着いた場所は。

『くらぶ美少年』

コタローの奴、いくらお金が必要とはいえこんなところでバイトをやっていたとは。オレ様だつてここがどういふ店なのか重々承知している。綾女には口が裂けても言えないのだ。

中に入ってみると、照明が薄暗く、けばいおばちゃんたちの化粧や香水の臭いが充満していた。

「気持ち悪いのだ」

早くコタローを探さねば。店内を見通せるようにテーブルの上に立つ。しかし、みんな似たような格好をしているのでよくわからないのだ。

オレ様は一番手っ取り早い方法を取った。

「コタローッ！ どこにいるのだーっ？」

五秒も経たないうちに、黒のタキシード姿のコタローが猛ダツシユで飛んできた。前髪もムースでちゃんとアップしていて、最初は誰かわからなかったのだ。

「何、人の名前大声で叫んでんだよ」

「気にするな。どうせ他の人間には聞こえていないのだ」

オレ様の声はオレ様の姿が見える者にしか聞こえないのだ。

「またわけのわからないことを言つて。ここは子供来るところじゃないんだ。早く帰れ」

コタローはオレ様をテーブルの上から降ろす。

「そうはいかないのだ。コタロー、綾女が危ないのだ。力を貸して

ほしい」

「尊酉が？ 尊酉がどうかしたのか？」

オレ様の切羽詰まった顔に、さすがのコタローも無視はできなかつたようだ。

「虎太郎、何してんだよ。宮郷夫人ご指名だぞ」

コタローと同じように黒のタキシードを着た男が話しかけてくる。「何って、この子が」

「この子？ 何寝呆けたこと言ってるんだよ。誰もいないじゃないか」この男にはオレ様が見えていないのだ。コタローの表情が硬張る。「何者なんだよ？」

「オレ様は座敷わらしだ。くわしく説明しているヒマはない。後二時間で奴の所に行かないと綾女が殺されてしまうのだ」

オレ様は強引にコタローの手を引っ張って店を出た。

「放せよ」

コタローはオレ様の手を振り払う。

「座敷わらしとか、尊酉が殺されるとか。わかるようにちゃんと説明しろよ？」

時間がないというのに、しょうがない奴だ。オレ様は簡略に事のあらましを教える。

「お前が座敷わらし？」

コタローは半信半疑でオレ様を見つめていた。

「しかも、宮郷和規がゴーストを使って、それを見破った尊酉が捕まったってのか？」

「そうなのだ」

「で、その妖怪除けの符が剥がせなければ、尊酉は救えないと？」「信じてほしいのだ。早く行かないと綾女が殺されてしまうのだ」

コタローは拳を強く握りしめた。

「二年ほど前に宮郷は父さんにもゴーストになれと誘いを掛けてきたことがあった。断った父さんはその直後に交通事故で死んだ」

もしかしたら、コタローの父親も宮郷に、いや空丸に殺されたの

かもしれない。オレ様の胸は哀しみと悔しさに締めつけられた。

「クビ決定か」

コタローはあきらめにも似たため息を吐き出した。

「コタロー、協力してくれるのか？ いい機会なのだ。あんなバイトは早く辞めてしまおうのだ」

綾女のためにはあんないかがわしいバイトをやらせておくわけにはいかないのだ。

「お前が言うことじゃないだろう。けっこついい金になったんだ。チップももらえたし」

「いいではないか。これで綾女に絵のモデルを頼むきっかけができたのだから」

「ななな何で、それを」

顔を赤くして照れるコタロー。綾女の言った通りこいつはいい奴なのだ。

オレ様はコタローの協力を得て、綾女の気配を探ることに集中した。しかし、綾女の気配が察知できなかった。空丸の奴、綾女に気を失わせたのだ。

「くそつ、これでは綾女の居場所がわからなのだ！」

「もしかしたら、宮郷のアトリエにいるんじゃないのか？」

「アトリエ？」

「白鳥山にあるらしいんだが、奥さんさえ近付けようとしないうさだ」

「何でそんなこと知っているのだ」

コタローはばつが悪そうに、

「宮郷夫人はあの店の常連なんだよ」

小声でいう。

なるほど。コタローのバイトも役に立つのだ。コタローはすぐにタクシーを呼び止める。綾女、すぐに行くのだ。無事でいてくれ。

座敷わらし

宮郷のアトリエはタクシーで一時間程行った白鳥山の中腹にあった。アトリエは、想像していたよりはかなり小さなログハウスだった。オレ様たちは気付かれないように少し離れたところでタクシーを降りた。様子をつかがいながらアトリエに近付くと、綾女を乗せた黒い車が停めてあった。

「あれなのだ。間違いない。綾女はここにいるのだ」

「どうやって侵入するつもりなんだ？」

「表から堂々となのだ」

うまく忍び込んで、空丸のことだ。すぐにオレ様の気配に気付くだろう。いや、もう気付いているはずだ。

「コタロー、行くのだ」

オレ様とコタローは表門の前に立った。離れていてもビシビシと感じる妖怪除けの符のパワー。

空丸の奴、一体何枚貼ったのだ？

まず、コタローが表門の符を剥がす。そして、玄関。

中に入ったオレ様たちを待っていたのは、空丸ただひとりだった。

「約束通り来てやったのだ」

「まさかお前が見える人間が他にもいたなんてな」

「綾女はどこだっ！ 早く綾女を返せ」

空丸は急にけらけらと笑いだした。

「最高だよ。ここまで主人に忠実だとはね。ムシズが走るよ」

笑うのを止めた空丸は凍てついた瞳でオレ様をにらみつける。

「オレ、気が変わったよ。あの娘にはやっぱりここで死んでもらおう。そのもうひとりの人間といっしょにな」

「約束が違うのだっ！ 空丸、どうしてしまったのだ。何があったのだ？」

「夢を見る時代はもう終わったんだよ」

空丸は妖力でコタローを吹き飛ばした。コタローは壁に打ちつけられる。

「くっ」

「コタローッ！」

「ほらほら、ぼやっとしてるとその人間が死ぬぜ」

コタローの体がまるで宙吊にされた人形のように室内を飛び交う。その都度壁に激突するコタローは苦痛に顔を歪めていた。

「コタローっ！」

オレ様はコタローのダメージを軽減するため、コタローと壁の間に割り込む。コタローの全体重がのしかかってくる。全身の骨が砕けそうなのだ。

「バカ、何やってんだよ？」

「コタローにもしものがあつたら綾女が悲しむのだ」

綾女に辛い思いはさせたくないのだ。

「主人でもない人間をかばうとはな。お前もバカな奴だ。そして、そのバカを助ける人間もな」

空丸は余裕の笑みを浮かべる。エネルギーは充分に残っているよ
うなのだ。

何が空丸のエネルギー源になっているのだ。どう考えても宮郷からは純粹な夢は感じられない。

奴から感じるのは……。

まさか？

今の空丸のエネルギー源は、負のエネルギーなのか。

「そこまでしてあの娘が助けたいか。だったら教えてやるよ。自分たちが無力だということをな」

空丸の身体が床に沈んでいく。

「空丸、待つのだ！」

空丸は消えた。

先に綾女を殺すつもりなのだ。

「どこかに地下へ通じる階段があるはずだ」

「よし、それを探すのだ」

オレ様とコタローは懸命に探した。焦るな。落ち着いてよく探すのだ。部屋を隈無く見回す。オレ様の目に悪趣味としか言いようのない宮郷の肖像画が映った。

「よく自分の絵など飾る気になるものだ」

オレ様は絵を外して後ろへ放り投げた。

「コタロー、あつたのだっ！」

絵を掛けていた所に押しボタンがあつたのだ。オレ様はボタンを押しした。すると、ギギツという金属音がして、床にメートル四方の穴が開いた。

地下へ降りる階段がある。

オレ様たちは急いで駆け降りた。

照明が異常にまぶしかった。

地下は上のログハウス以上の広さだった。部屋が幾つもあり、その都度コタローに符を剥がしてもらった。

「何なのだ、この部屋は」

行く部屋すべてに四季折々の情景がセットになって置かれていた。

「おそらく、ゴーストに風景画を描かせるために作ったんだろう」

「手のこんだことをする奴なのだ」

オレ様たちは次の部屋へ向かう。そこは鉄格子に閉ざされた冷たい部屋だった。牢獄みたいなのだ。

誰かいるのだ。どこまでが髪の毛でどこからが髭なのか。もう区別がつかないほどボサボサに伸びきっている。顔はよく見えないが、その細い腕を見る限りではかなり痩せ細っているのだ。年寄りのようにも見えるが、何才ぐらいなのか検討もつかない。テレビで見たことのある囚人の方がまだマシなのだ。きっと宮郷のゴーストをやっている奴なのだ。もしかしたら、綾女の居場所を知っているかもしれないのだ。

「おいっ！」

男は反応しない。オレ様の声が聞こえてないようだ。ってことは見えてないのだ、オレ様のことが。

「コタロー、奴に綾女のことを聞いてみてほしいのだ」

「わかった」

コタローは鉄格子に顔を近付ける。

「ここに高校生ぐらいの女の子が連れてこられなかったか？」

コタローの不躰な問いに、今までピクリとも反応しなかった男が目をむき出しにしてこっちにやってきた。

「た、助けてくれ。このままでは俺は宮郷に殺されてしまう」

かすれた声を絞りだすように男は言った。

「窪田さん？ あんたもしかして窪田さんじゃないか？」

コタローは近付いた男の顔を見て声を上げる。

「俺だよ。秦満治はたみつはるの息子の虎太郎だよ」

「秦の息子？ 虎太郎くんなのか？」

コタローとこのゴーストの男はどうやら知り合いだったらしい。

男は涙を流している。

「コタロー、涙のご対面は後にするのだ」

「ああ、わかってるよ」

コタローは再度綾女のことを聞く。

「その子ならこの奥の部屋へ宮郷が連れていったよ」

「奥の部屋だな」

「すまない、虎太郎くん。こんなことになるんだったら、秦の言うことをちゃんと聞いておくべきだった」

男はコタローの手をしっかりと握りしめて懺悔した。

「父さんの？」

「俺がゴーストになるのを最後まで反対してくれたのが、君のお父さんだったんだよ。夢は捨てるなってな」

「父さんがそんなことを……」

「コタロー！」

オレ様はしびれが切れたのだ。コタローの手を引っ張る。

「窪田さん、もう少しの間だけここで辛抱しててくれ。後で助けにくるから」

「気を付けるんだぞ。奴は変な力を持っている」

「わかってるって」

オレ様たちは奥の部屋の前に立った。この部屋の鉄扉には符が貼られていなかった。

まさか、もう綾女は。

オレ様は慌てて中に入った。この部屋のセットは雪国の小さな神社だった。百年前を思い出させる、そんな懐かしい光景だった。

「綾女っ！」

綾女は傷だらけになって作り物の雪の上に倒れていた。

コタローが綾女を抱き起こす。

「尊西っ！」

「あれ……センパイ？ 綾女、夢見てるのかな？」

「綾女、しつかりするのだ！」

意識が朦朧としている綾女に、オレ様は何度も声をかける。

「天ちゃん、どうしたの？ 傷だらけじゃないの？」

「綾女ほどではないのだ」

綾女は傷だらけの手でオレ様の頬をなでる。

「すまないのだ。オレ様が腑甲斐ないばかり

に、綾女をこんな目に合わせてしまったのだ」

「そんなことないよ。天ちゃん、ちゃんと綾女を助けにきてくれたもん」

綾女はにつこりと微笑んでくれた。

「感動のご対面はすんだか？」

寶銭箱の上に、狂喜した空丸はいた。

「空丸！ なぜ負のエネルギーを受け入れたりしたのだ？」

「オレは時代に従っただけさ」

「空丸、早くこいつらを始末しろ」

負のエネルギーを媒介とする妖怪ならどんな人間でも姿を見ることができる。自分の秘密を知られ崩壊を恐れる宮郷は、怯えた目で空丸に命令する。あくまで自分の手は汚さないというわけか。こんな男が空丸の主人だとは。

「空丸、目を覚ますのだっ！」

「目なら覚めてるさ」

空丸は綾女を見て、ニタリと笑った。

「尊西っ！」

コタローが叫んだ。綾女が急に胸を押さえて口をパクパクし始めたのだ。

座敷わらし

「綾女、どうしたのだった？」

綾女の顔がどんどん蒼白になっていく。

「空丸っ！ 貴様、綾女に何をしたのだ？」

「その娘の周りだけを真空にしてやったのさ。今のオレならそれぐらい造作もないことさ」

「空丸、もうお前には何を言ってもムダなのか？ あのおとなしかつた空丸にはもう戻れないのか？」

「うっとおしいんだよ！」

空丸にオレ様の想いは届かなかった。

「天丸……」

綾女を支えていたコタローが倒れる。まさか、コタローも。

「コタローッ！」

「悪かったな。何の……役にも立て、なくて……」

「オレ様の目の前で死んだりしたら承知しないのだった！」

コタローはムリして笑みを作ってみせた。

「空丸、オレ様は貴様を許さないのだった！」

主人に害をなす者は排除しなくてはならない。オレ様の命に代えても空丸は倒してみせる。

「このオレに勝つつもりでいるのか？」

空丸は鼻で笑う。オレ様はゆっくりと空丸に向かっていく。

「オレ様は座敷わらしだ。主人を幸せに導くことが役目なのだ。それを放棄した貴様などに負けたりはしないのだ」

オレ様は限られた妖力を右手に集中させた。こんなことになるんだつたら、青年ヴァージョンなどなるのではなかったのだ。

「天…… ちゃ、ん。ダメ…… だよ」

綾女は苦しげな声でオレ様を呼び止める。

「綾女！」

「せつかく……会えた、仲間なんで、しょう。ケンカ、なんか……しちゃ……」

綾女は言葉を絞りだそうとする。自分をこんな目に合わせた奴なのに。戦うなって言うのか？

「綾女はバカなのだ」

涙が止まらなかった。

「空丸、もうひとりも始末したのか？」

オレ様が見えない宮郷は焦っていた。オレ様が死んだかどうかはわからないのだ。

「空丸っ！」

宮郷の催促する声が飛ぶ。

オレ様は覚悟を決めた。

「うおおおおおおおおおっ！」

空丸は獣のような雄叫びを発した。

「オレは絶対に認めない。そんな人間がまだいることを」

空丸は妖気の塊をぶつけてきた。

オレ様は綾女とコタローを守るため前に出た。オレ様は自分の身体でそれを全部受け止めた。妖気を通して伝わってくる空丸の憎しみと哀しみ。奴は大切な主人を時代から守ってやることができなかつたのだ。だから、時代を恨み、負のエネルギーを受け入れたのだ。でも、それは間違っているのだ。

「空丸、このふたりの夢を感じるのだ。まだ世の中には時代に負けず、夢に向かって生きている者はたくさんいるはずなのだ」

「もう手遅れなんだよ」

空丸の笑みに淋しさが宿る。

その時、空丸はすでに綾女たちの周りの真空を解除していたのだ。オレ様はまだそのことに気付いていなかった。

「空丸？」

空丸の足が一瞬透けて見えた。

「何をしている？ 早くあいつらにとどめをさせ！」

「うるさいんだよ。ゲス野郎が」

空丸は妖気で宮郷を吹き飛ばした。宮郷は壁に頭をぶつけて気絶する。

「まさか、貴様……綾女の夢を」

「そうだよ。オレの中にあの子の夢が流れてきたんだよ」

負のエネルギーを受け入れた者が正のエネルギーを吸ってしまうと、拒否反応を起こし消滅してしまうのだ。

「だから、お前の主人を想う気持ちを確かめたくなった」

今度は空丸の全身が透けてきた。オレ様は急いで空丸に駆け寄る。

「もっと早くお前に会いたかったよ……」

「空丸っ！ 消えるなあっ！」

消えようとする空丸をオレ様は必死で抱きしめた。空丸はオレ様の腕の中から消えていった。

「天ちゃん」

綾女がオレ様を抱きしめてくれた。いつもと逆なのだ。

オレ様は綾女の胸の中で声を殺して泣いた。

宮郷が気を失っている間にコタローが警察に通報し、すぐに駆けつけてきた警官たちに宮郷は逮捕された。当然、綾女たちも事情聴取とかで連れていかれた。やっと自由になれたのは、太陽が顔を覗かせた頃だった。

「こんなこと言っても誰も信じてくれないんだろうなあ」

コタローは大きく背伸びをする。

「すまないのだ。しかし、綾女と話す機会ができたのだから、これもケガの功名というものなのだ」

オレ様の言葉に綾女とコタローは目を合わせて顔を真っ赤にする。世話の焼ける奴らなのだ。

「尊西、昨日は悪かった。実はお前が白鳥公園にいること知っていたんだ。あの時はいきなりだったし、絵に情熱をかけるお前にちょっとだけ嫉妬していたんだ」

「ううん。綾女の方こそセンパイの気持ち何にも知らなくて」

ふたりはうつむいたままそれ以上は何もしゃべろうとはしなかった。せつかくのチャンスだというのに、ウブすぎるのだ。まあいいか。焦ることはない。このふたりにはこれからいくらでも時間はあるのだから。それにコタローがオレ様の大事な綾女にふさわしい男かどうか見極めなければならぬ。充分資格はあると思うのだが。

「綾女、家に帰ろうかな」

綾女は小声で呟いた。

「綾女……」

「おじいちゃんの画廊がなくなっちゃうのはいやだけど、夢さえ忘れなければまた造ることできるだもん」

この一件で綾女は大きく成長していた。

「俺も一度家に戻るよ。母さんが心配してるだろうし」

「待つのだ。コタロー。いいバイト先を紹介してやるのだ」

「リカーショップ・たかとり？ 酒屋？」

コタローは店の看板を見上げた。

「時給は安いが、あんな店よりは健全な所なのだ」

「あんな店って？ センパイ何のバイトしてたんですか？」

綾女が会話に参加してくる。

「いや、その」

コタローは口籠もった。

「や、焼鳥屋なのだ」

「焼鳥屋さん？」

オレ様は思わず口からでまかせを言ってしまった。しかし、綾女はそれで納得してくれた。

家の中に入ったオレ様たちを待っていたのは憤怒の形相の祐子だった。包帯やバンソーコーだらけの綾女の姿を見て、祐子は見えないオレ様に当たりちらす。祐子の目は赤く充血して、くまもできていた。きつと一睡もせず綾女が帰ってくるのを待っていたのだ。

「ごめんなさい、お母さん」

綾女は昨日あったことを一部始終話した。しかし、綾女の説明で祐子がどこまで理解できたかは謎である。

「天丸、あんたがついていながらどうなってるのよ」

見えないはずなのに、祐子はオレ様に向かって怒りまくった。当たっているだけに反論できない。できたとしても、祐子には聞こえないのだが。

「それでね、お母さんにお問い合わせがあるの」

綾女は猫なで声で祐子に甘えた。

「そのさつき話した秦センパイをね、うちで雇ってほしいの」

「仕方ないわね。綾女の命の恩人じゃ」

祐子は渋々許した。

「ありがとう」

綾女はコタローの待つ画廊へ急いだ。

「あの子一晩でずいぶん大人になったような気がするわ」

祐子は走っていく綾女の背中を見て呟いた。

綾女は店を抜けて、画廊に入ってしまった。

オレ様は気を利かせて、ドアの前で待つことにした。

ドア越しに聞こえてくるふたりの声。

「この絵のモデルは尊酉なんだろう？」

「うん。おじいちゃんの最後の絵」

コタローは飾つてある繁政の絵のことを言っているのだな。

「お前のおじいさんがあの尊酉繁政だったなんてな。名字が同じな

んだからすぐ気付けばいいもんだけど」

「おじいちゃんの才能を受け継いでればもう少し絵がうまく描けた

のになあ」

自覚はしていたのか。しかし、あれはもう少しというレベルでは

ないのだ。

「そんなことない。お前はおじいさんの絵に対する情熱をしっかりと

受け継いでるじゃないか」

「センパイ」

何かいいムードになってきたのだ。オレ様はドアに耳を押しあて

た。

「綾女、そこで一気に迫るのよ！」

頭上に忍び声で叫ぶ祐子がいた。おいおい、母親がそんなこと言っ
つていいものなのか？

「あ、あああああのセンパイ」

ついに綾女、愛の告白の時なのだ。

「綾女はこの絵がとつても好きなんです。何となく画風がセンパイ
に似てるでしょう？」

オレ様と祐子がずっこけたのは言うまでもなかった。

「ちよつと、天丸。何とかなさいよ」

煮えきらない娘にしびれを切らした祐子はオレ様に言うてくる。

何とかしろといわれても、何ともやりようがないのだ。

「見えてなくてもいることはわかってるんだからね」

祐子にはかなわないのだ。まったく、人、いや座敷わらしあつか
いが荒いのだ。

仕方なくそーつと中に入ってみると、コタローが一枚の絵を抱い
ていた。

何があつたのだ？

「間違いない。これは父さんが母さんをモデルにして描いた絵だ」

何と繁政が買った絵の中にコタローの父親の描いた絵があつたの
だった。

世間とは広いようで狭いものなのだ。

「おじいちゃん、言ってたよ。この絵には作者の愛情がたくさん満
ちあふれてるって」

「父さん……」

「その絵よかったら、センパイにお返しします」

「けど、これはお前のおじいさんの」

「いいんです。この画廊もなくなっちゃうし。それだったら、センパイが持つてくれた方がおじいちゃんも喜ぶと思うの」

ふたりの距離はどんどん近付いていく。

綾女もコタローもオレ様が入ってきたことに気付いていなかった。

「尊西、笑わないで聞いてほしいんだ」

「はい？」

「俺今回の事件でいろいろと考えさせられたよ。やっぱり夢を持つのも悪くないって」

「センパイの夢って何なんですか？」

「俺の夢は……」

少しの間をおいて、コタローは続けた。

「お前をモデルにして絵を描きたいんだ。そして、いずれはお前とずっといつしよに絵を描き続けていきたい」

こ、これはもしかしてプロポーズというやつではないのか。よくもそんなことがぬけぬけと言えたものだ。ちよつと気が早すぎるぞ、コタロー。

「天ちゃん、聞いた？ センパイがまた絵を描いてくれるんだって」「え？」

綾女がいきなりオレ様に抱きついてきたのだ。なんだ、オレ様が入ってきたこと気付いてたのか。って、違うのだ。コタローが恨めしそうな顔でオレ様を見る。

「綾女、肝心なところが抜けているのだ」

「何が？」

どうやらこのテのタイプにはストレートに言った方がいらしい。

「コタローは綾女といっしよに絵が描きたいと言っているのだ」

「綾女と？」

「それがどういう意味なのかわかっているのか？」

綾女はしばし考え込んで、
「よくわかんないんだけど」

と、笑ってごまかす。オレ様とコタローは同時に大きなため息をついた。おそらく、ドアの向こうで聞き耳をたてている祐子もだろう。

「いいよ、天丸。焦ることじゃないからな」

なんか昨日のコタローとはずいぶん違うのだ。

「今度は逃げずにがんばってみるさ。母さんには苦労かけると思うけどな」

夢を取り戻したコタローの瞳は輝いていた。

「あ　　っ！」

綾女が急に大声を上げた。

「もしかしてさっきの意味って？」

やっと気付いたのか。鈍い奴なのだ。

「天ちゃんをモデルにしたってことだったんでしょ？」

「……………」

「違うの？」

突拍子もない言葉にオレ様もコタローもどう返事をしていいのか困った。どう考えればそうなるのだ？

「そういうことにしておくか」

オレ様とコタローは顔を見合わせて笑った。仲間外れになった綾女は、頬をふくらませた。

その年の十二月。

繁政の画廊はなくなり、リカーショップ・たかとりがディスプレイトショップとして新装オープンすることとなった。

座敷わらし

終わり。

と、言いたいところなのだが、この話にはまだ続きがあったのだ。

エピソード

冬休みに入って、コタローは朝からずっと店で慌ただしく働いている。ついには綾女までが手伝いに駆り出される始末だった。信じられない状況なのだ。何もできないオレ様は、店先で黙ってその光景を見ていた。

そこへ。

「ぼうや、綾女というお嬢ちゃんがここにいると思うのじゃが？」
白髪に白い口髭を生やした顔中しわだらけのじいさんが話しかけてきた。

「オレ様はぼうやなどではないのだ。天丸というちゃんとした名前があるのだ」

そういうと、じいさんはしわだらけの顔をくしゃくしゃにして笑って、オレ様の頭をなでた。完璧に子供扱いしているのだ。って、ここにもオレ様を見える人間が現れたのだ。いや、このじいさんは……。

「ちょっと、ここで待っているのだ」

オレ様は綾女を呼んだ。

「あの何か？」

「託った物を届けに来たのじゃ。ほら、手を出してごらん」

綾女はじいさんの言う通りに右手を差し出した。じいさんは綾女の右手に小さな金色のベルを置いた。メッキが剥がれた錆ついたベルだ。

「これって、もしかして？」

もしかしなくても、間違いなく繁政からもらった『願いが叶うベル』なのだ。

「今度はなくさぬようにな、お嬢ちゃん」

そう言つと、じいさんは何処かへ去つていった。綾女はいつまでもじいさんに手を振っていた。

「尊西、何かあったのか？」

心配になつたコタローが様子を見にきた。綾女はうれしそうにコタローに説明する。

「へえ、願いが叶うベルねえ。で、尊西は何を願うんだ？」

「雪」

「雪？」

「うん。だって、今日はクリスマスイヴだもん。ホワイトクリスマスつてロマンチックだし」

欲のない奴なのだ。ま、もっとも今の綾女の願いといつたらそんなもんなのだ。

オレ様の頬に何やらひんやりとしたものが触れた。空を見上げると真っ白な雪が降り注いできたのだつた。

綾女は願いが叶つたと大はしゃぎだ。

にしても、この雪は本当にベルが叶えてくれたのか、それとも…。

あのじいさんが何者かだつて？ そんな野暮なことは聞くものではないのだ。

おわり

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2757e/>

座敷わらし

2009年3月24日09時49分発行